椎名麟三全集

23

椎名麟三全集

■

雑纂

冬樹社

椎名麟三全集23

昭和五十三年三月二十八日初版第一刷発行

著　者—椎名麟三
発行者—高橋直良
発行所—冬樹社　東京都千代田区神田保神町二—一八
　電話東京二六四—〇三四六　振替東京八—七七五七
印刷所—三容堂印刷株式会社
製本所—株式会社美成社
装幀者—栃折久美子
写　真—林　忠彦
© Rinzo Shiina 1978
0391-02023-5190

第二十三巻目次

参考作品

丹野短助氏の人生手帖……5
鬼子の場合……45
夜警番の日記……63
問題の核心……177
西に東に……201
姫山物語……213

評論補遺

昭和二十二年〜二十三年……267
文芸時評　わが文学的略歴　「湖中の女」を観て　悲劇の実践　世界へ　「重き流れのなかに」あとがき　「深尾正治の手記」あとがき　無意味の意味　アンケート・私は何を読むか　固定価値の転換　「永遠なる序章」について　妻君論　ニヒルの克服　僕はアイロニイにおいてのみやっと政治的な人間である　『序曲』編集後記

昭和二十四年……289
アンケート・私の一票　左翼青年の解剖　職業と自己形成　廃墟のモラル　私の文学について　インフレーションの文学的意味について　かぼちゃの話　ニヒリズムからの快癒をこそ　友の死について　「自由を索めて」跋　「戦後主要作品集」編集委員のことば　人間の根拠

昭和二十五年〜二十九年……323

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「病院裏の人々」あとがき　梅崎春生・人と作品　かくて私は進んだ　『山桜』文芸特輯号・選評　「赤い孤独者」について　「赤い孤独者」のノートから　安部公房「赤い繭」を推す　「嫉妬」あとがき　アンケート・私はこんな仕事をしたい　『山桜』選評　アンケート・作家の態度　探偵小説について　倨傲について　「新文学全集椎名麟三集」あとがき　アンケート・私の選挙観　「邂逅」に寄せて・作者の言葉　超越と世俗　「自由の彼方で」あとがき　文庫に拾う

昭和三十年～三十四年……351

読者の皆様へ　受賞者の横顔・梅崎春生　映画・低俗な大衆意識　ある会合での感想　総選挙に臨んで　階段について　衣・食・住　「愛の証言」あとがき　梅崎春生　「その日まで」あとがき　「創作代表選集」あとがき　「人生の背後に」あとがき　グリップが気に入った　「愛と自由の肖像」あとがき　私の何が読まされるのか　川和孝「撮影所」序　「生きる意味」あとがき　遠い友へ　筆耕屋時代　「私の聖書物語」あとがき　模範論議

昭和三十五年～三十八年……383

庶民文学としての短歌　武田泰淳のこと　五月祭「第三の証言」作者の言葉　創芸「第三の証言」作者の言葉　奥付にあったもの
「私の人生手帖」あとがき　神聖と汚辱と　勤労ということ　十人座「第三の証言」作者のことば　神の前の裸身　ある日の武田さん
「天国への遠征」について　遠藤周作「宗教と文学」

昭和四十年〜四十六年 …… 419

ドストエフスキーへの誤解　自由な愛　田中千禾夫「肥前風土記」初演のときの感動から　漱石と私　高木幹太「生の意味」推薦文
人間の自由への道・ドストエフスキー「罪と罰」　出会いについて
梅崎全集の編集にあたって　キルケゴール全集刊行によせて　安田貞治「現代生活と聖書」推薦文　「地底での散歩」あとがき　高木文雄「夏目漱石論」序　ある夕方に　幼女の踊り　「第三の証言」作者の言葉　文学と自由　〃地獄へ行くんや〃　石堂秀夫「詐欺師たち」推薦文　アンケート・梅崎春生　松本鶴雄「背理と狂気」推薦文

昭和四十八年〜 …… 453

石の道化師　祈り　祈り　石島三郎牧師宛書簡
わが心の自叙伝……463
第三の自由……485
たねの会月報……541
マタイ福音書……611
戦後を再形相する思想……川西政明　633
解　題……647

雜纂

参考作品

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

丹野短助氏の人生手帖

まえがき

この丹野短助氏の人生手帖は、弟子は師に似るのたとえの通り、彼の崇敬おくことあたわざるあの「ドン・キホーテ氏」の奇行に似ているかも知れない。しかしドン・キホーテ氏は老いておりやせていようとも、馬ではないといわせない動物に乗り、給金がもらえないからといって家来ではないといわせないサンチョを従えた、悲しくも堂々たる騎士であることは人々の知るところである。だが、わが短助氏は、資本主義経済機構のなかに生きている安サラリーマンであり、貧乏という名のそれ以外にはひとりの従者もないのである。

しかもなお、このふたりは似ているのである。というのは、短助氏はドン氏と似たいと思っているからだ。全くあの風車の悪魔と壮大にたたかうドン氏の姿は、いつ短助氏に思い出されても何と彼の胸をふるわせることだろう。まことにドン氏は、短助氏の師であり模範であり指導者であり、胸のエンジンの点火栓である。ドン氏は、騎士の信仰に燃えて世の悪魔とたたかった。だから、わが短助氏も世の悪魔とたたかうのである。

だが騎士の信仰のもてない彼は、キリスト教の信仰に燃えていた。だからこの短助氏の手帖の理解しがたいところは、実に、騎士の信仰ではなく、キリスト教のそれであるという点に由来するらしい。

だが短助氏の手帖にしたがって、彼の物語をすすめる前に、彼の今日に至る経歴を語らねばならないだろう。決して筆者である私の必要からではなく、近代のリアリズムというやつがそれを要求するからである。

1　短助氏の多労なる誕生

短助氏は、大正九年八月に本所の大島町で生れた。だから現在は、満で三十六、数え年で三十七である。彼の母親はトラといったが、いつも胃弱で青い顔をしていた。もちろん父もいた。だが彼は、料理屋の下働きを十五年もつとめているのに、どうしても一人前の板前になることは出来ないというような男だったのである。だからトラは一日中マッチ箱を張っていた。しかしトラは、それに少しも不平を感じていなかった。彼女の母親もそうして来たので、マッチ箱を張ることが生れつきの自分の自然と感じていたからである。

ある日トラは、二度流産した後で、三回目の妊娠をしているのに気付いた。夫の熊太郎に話すと、彼はこういったのである。

「コンチキショウめ！」

トラは、どういうわけかその自分に悲惨を感じた。で、彼女は一軒おいた彼女の長屋の端の家へ行ったのである。その家は、オガミヤさんだったからだ。六畳のうす暗い部屋の一隅に、白木も鮮やかな三段の棚をつくり、その棚に草を編んだ青すだれを垂れて、一番上の棚には、やはり白木づくりの厨子がまつってあり、その下の二段には、ブドウやら半分に切った西瓜やらナスやキュウリやらタイヤキやらがそなえてあって、

その門衛のようにサカキを差した素焼の瓶子が二個立番させてあった。

ミコのオカネさんは、戸籍上の年齢は五十一だのに、四十八だといっていた。色が黒くひっつめ髪を結っていて、夏でもメクラ縞の着物を着ていた。主人は、太り気味のオカネさんに反して、やせた男でなかなかの物知りでもあり、おしゃべりでもあったが、何もしないで、いつも近所の床屋へ行って一日中遊んでいた。だが、オカネさんの方は、いつもおこったようにムッツリしていて陰気くさく、近所のひとともあまり口をきかなかった。もちろん買物なんかで外へ出るときはあるのだが、ふしぎなことに、近所のひとはその彼女の姿を外で見たことはないような気がしていたのである。

トラは、自分の墓でもあるようにオカネさんを見ていった。

「また、ガキが出来やがってな」

するとオカネさんは、暗い眼をしながら力のない情なさそうな声で肯いた。

「ああ、あ」

「どうしてわたしはこんな不仕合せな眼に会うんだろう」

「うう、う」とオカネさんはいった。

「わたしは、いやになってしまった」とトラは訴えるようにいった。「また流産して十日も寝込まなければならないだろ？　一体、これは何ということだね」

オカネさんは、相変らず暗い眼をしたまま答えた。

「ああ、あ」

「だから一ペン、わたしに何が憑いてるのかおがんでもらいたいんだ」

オカネさんは、メクラ縞の着物の上にノロノロ白い装束を着た。そして部屋の隅の神棚の前へ坐ると、御

幣をもって長々と平伏していたのである。で、トラも仕方なくそのオカネさんの後へ平伏していた。するとオカネさんは、ふいに身を起したと思うと、女でも人間でもない、いわばけもののようなうなり声を出して祈りはじめたのである。その彼女の身体は、おこりにかかったように大きくはげしくふるえ、見ていても恐ろしいくらいなのだった。突然、そのオカネさんから怪鳥のような声がほとばしった。

「先祖のたたりじゃ」とその声はいった。「お前の先祖たちの三人もがひとを殺しとるから、その先祖のわるい霊が、その子孫のお前の腹へ入って、かわいい子孫のお前を苦しめなければならないんじゃ。流れた子は、そのひとりずつのわるい霊のかたまりだったんじゃ。いま宿っとる子は、子じゃない、先祖の三人目のわるい霊のかたまりじゃ」

トラは、おびやかされて声をふるわせながらたずねた。

「わたしは、わたしは、どうしたらいいんだい？」

「殺されたひとをまつれ！」とその声は叫んだ。「先祖にかわって殺されたひとにおわびをするんじゃ。でないと、こんどの三人目のわるい霊は、お前を殺すぞ」

トラは、十銭のオガミ料をおいて、世もあらぬ思いでオガミヤさんをとび出した。何が何だかわからなかった。しかし何が何だかわからないので、一層自分がおそろしかったのである。

夫の熊太郎は、トラから神の託宣を聞くと、こう叫んだのである。

「コンチキショウめ！」

で、トラは、翌朝オカネさんのところへ今度は、腹にやどっているわるい霊のかたまりを、安全に追い出してもらいに行ったのである。オカネさんは神に祈れば、この世にできないというものがないからだ。オカネさんは、トラにかわってトラの先祖たちに殺されたひとをまつってやり、無事安全に、つまり病気もせず

死にもしないで、トラの腹からわるい霊を追い出してやる、祈禱をしてやったのだ。

しかしその祈禱の実現するためには、六ヵ月近くもかかった。そのときになってやっとわるい霊のかたまりはトラの腹から追い出されたからだ。しかもそのわるい霊のかたまりは、その自分自身を実証したのである。というのは、そのときそれは、トラを子癇で殺してしまったからである。

しかしそのわるい霊のかたまりを、世界中の誰も罰することはできなかった。それだけでなく、産婆は、トラの死体の傍で、そのわるい霊のかたまりに産湯をつかわしさえしたのだ。熊太郎は、そのトラの死体を見、それから人間の形をしたわるい霊のかたまりへ眼をやりながら、またもや彼は、こう叫んだのである。

「コンチキショウめ！」

これがわが短助氏の出生の秘密である。だから短助氏は、彼の師であるドン氏にならって悪魔とたたかうとすれば、先ず悪霊そのものである彼自身とたたかわねばならないということは明瞭であった。

短助氏は、どうしたわけか三十一で洗礼を受けているのであるが、彼はマタイ伝の第八章を読んだとき、ギクッとしたのだ。そこには、こう書かれていたからだ。

「夕暮になると、人々は悪霊につかれた者を大ぜい、みもとに連れてきたので、イエスはみ言葉をもって霊どもを追い出し、病人をことごとくおいやしになった」

つまり短助氏は、追い出された悪霊として彼の生涯の第一歩を踏んだのである。次回において少年時代の彼が、どのように悪霊そのものである彼自身とたたかったかを記しておかなければならないだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com